

## (資料1)「症状の意味」と「病気と症状の関係」(オルガノン該当单元)

### (症状の全体像)

§7 適切なレメディを示唆してくれる唯一のものは、生命エネルギーの病的状態とも言える病気の内的本性を反映した”症状の全体像”だけである。

症状の部分ではなく、全体が除去すべきものである。

### (病気と症状の関係)

§8 症状の全体が取り除かれた後には、病気が残っていることはありえない。

＝病とは VF の乱れであり、その表現がなくなるということは乱れが解消されたことになる。「目に見えない VF の乱れ＝症状の全体」

(注) 病気の徴候や症状はもはや後に残っていないし、戻った健康がいつまでも続いているというように、真の治療家によって病気から回復した人があるのに、すべての身体的な病気がまだ体内に宿っていると決めてかかることは、常識をないがしろにすることにはならないだろうか。

以前これまでの医師たちの有力者であったフーフランドは、「ホメオパシーは、症状は取り除けても、病気はそのままである」(『ホメオパシー』27 頁 19 行を参照) と言って同じことを主張した。彼がそういったわけは、一つには、ホメオパシーが人類の健康に向かって歩みだしたことに對する悔しい思いからであり、もう一つは、彼は病気をまったく物質的に捉えていたからである。ようするに、彼は、病気とは、病的に乱れた生命エネルギーによって身体がダイナミックに変化した状態、すなわち健康状態の変化したものだと思えることができなかったのである。その代わり彼は、病気は**物質的なもの**であると考えた。治療した後にも物質的なものが体内のどこか隅っこに残っているかもしれないと思ったのである。つまり、どんなに健康なときであっても、残った物質がいつかそのうち勝手に突然現われてくる、というわけなのだ。ひどいことにこれまでの病理学は何も見えてこなかったのである。このような病理学が、気の毒な患者からほこりを取り払うだけの掃除のような治療法を編み出したのも、当然といえば当然である。